2. 寄稿:経験を地域の未来につなぐ　鎌倉の文化財保存と観光振興のバランス

（鎌倉・湘南観光コンサルタント　菊田 豊明）

カーペンターズの「イエスタデイ・ワンス・モア」に心を動かされ、英語を学び始めたのが私の原点である。中学時代から大人に交じって英会話スクールに通い、ラジオ英会話や FEN のニュースを聴くのが日課だった。一方、高校の修学旅行をきっかけに奈良・京都の寺社や文化にも惹かれた。海外への関心と、日本の歴史や文化への興味。この二つが、思えば今の仕事につながっている。

大学ではスペイン語を学び、卒業旅行では『地球の歩き方』とユーレイルパスを頼りに、約一か月間スペインを旅した。就職活動は思うようにいかず、最終的に入社したのは、昔から好きだった旅行会社だった。法人営業を経験した後、ホテル業界へ転職。やがて米国のホテルで働く機会を得たが、英語には自信があったはずなのに、現地の同僚の会話についていけず、会議の内容も半分ほどしか理解できない。自分の未熟さを痛感した経験は、今でも忘れられない。

その後はホテルの運営会社変更に伴う転職活動や、マレーシア・クアラルンプールでの新規ホテル開業準備など、予定どおりには進まない出来事が続いた。それでも、旅行会社や国内外のホテルで営業・マーケティングに携わり、さまざまな土地と人に出会うことができた。振り返れば、思いどおりにならなかったことも含め、一つひとつの経験が次の機会を連れてきてくれたように思う。

縁あって鎌倉に住み始めてから二十余年。仕事では舞浜、京都、奈良などを転々とし、コロナ禍のさなか、還暦を機に現役を退いた。さて、これから何をしようか。明確な計画があったわけではないが、鎌倉の市民活動センターや江の島の観光案内所で働く機会を得た。そこで地域のために活動する方々と知り合い、長年の仕事とは異なる形で社会と関わる面白さを知った。

転機となったのは、鎌倉市の創業ビジネスコンテストに、自分の温めていた事業案を応募したことだ。残念ながら認定には至らなかったが、せっかく考えたのだから実際に始めてみようと決意した。こうして、高付加価値の旅行者を対象に、鎌倉・湘南の観光課題の解決と持続的な発展を目指すインバウンド事業に取り組み始めた。

鎌倉は国内外から多くの人が訪れるまちである。しかし、訪問が日帰り中心で、鶴岡八幡宮や大仏、小町通りなど限られた場所に人が集中する一方、地域に落ちる消費は十分とはいえない。混雑や交通への影響が住民の負担となり、観光の恩恵を実感しにくいという声もある。観光客が増えれば地域が豊かになる、とは必ずしも言い切れないのだ。



私は旅行・ホテル業界で培った経験を生かし、鎌倉でゆっくり滞在し、寺社や禅、工芸、食、自然などを深く味わってもらう観光の可能性を探っ

ている。宿泊施設の誘致にも取り組むのは、滞在時間が延びれば、地域の飲食店や事業者への消費、雇用の機会が広がると考えるからだ。そして、もう一つ大切にしたいことがある。観光によって生まれた収益が、寺社をはじめとする文化財の保存や修復にも還元される仕組みをつくれないか、ということである。



海外の旅行者にとって、鎌倉の魅力は有名な名所を短時間で巡ることだけではない。静かな寺院で心を整え、地域の職人の技に触れ、海や山の風景の中で土地の暮らしを感じる。そうした体験を宿泊と組み合わせて提案することが、鎌倉ならではの価値を伝え、地域に長く滞在してもらうことにつながると考えている。

文化財を守ることと観光を振興することは、対立するものではないはずだ。地域の歴史や文化を大切にしながら、その価値を訪れる人に伝え、得られた利益を次の世代へ引き継ぐために使う。そんな好循環が生まれれば、観光は地域にとって負担であるだけでなく、文化を守り、暮らしを支える力にもなり得る。

現役時代に身につけた知識や人とのつながりは、退職とともに失われるものではない。地域の課題に目を向け、これまでの経験を別の形で役立てることで、新しい役割が生まれる。私自身、まだ道半ばであり、試行錯誤の連続である。それでも、第二の人生で得た出会いを大切にしながら、鎌倉・湘南の未来に少しでも貢献できるよう、挑戦を続けていきたい。



補：「寄稿」のバックナンバーは https://www.japa.fellowlink.jp/professional に掲載